沖縄県立看護大学紀要第４号（2003年３月）

報　告

へき地山村に居住する独居高齢者の“生活の術”

－参与観察で把握した生活実態から－

當山冨士子[1)]　戸田圓二郎[2)]　田場真由美[1)]

筆者は、へき地山村に居住する独居高齢者の生活について、参与観察と電話により把握し、その“生活の術”について検討を行った。その結果、以下のことが確認出来た。なお、ここで言う“生活の術”とは、生活の方法や手段という意味で使用した。

１）今回の対象において、精神的扶養は成人子である子供からの扶養をはじめ、対象者本人による積極的な友人の獲得、ペット、亡き夫や先祖、近くの神々への関心により扶養されていることが推察された。
２）経済的扶養については、公的年金を主にしており、その他、親族が郵便という流通を活用、対象者本人も公的・私的に郵便配達人を活用していた。
３）身体的扶養については、対象者自身が日常の生活を維持できる能力を持ち合わせていた。しかし、天候の悪化時には公的な支えが必要であることが確認出来た。

キーワード：独居高齢者, へき地山村, 参与観察, 生活

Ⅰ．はじめに

戦後、我が国の平均寿命は著しく伸び、世界有数の長寿社会となった。その一方で、高齢化の進展に伴い、介護を必要とする高齢者が急速に増えることが見込まれるとし、行政レベルでの保健医療福祉対策が行われつつある。

厚生省は、――21世紀の高齢化社会は、戦後の第１次ベビーブーム世代である、「団塊の世代」が高齢世代の仲間入りをしてくる社会である。「団塊の世代」は、「新しい高齢者」として、高齢社会のイメージを変えていくことが予想される。新しい高齢世代は、…（中略）…社会に支えられる存在ではなく、社会を支える存在として重要な役割を果たすことが期待されている[1)]。――としている。それでは現在、社会に支えられる存在としての高齢者の生活実態はどうであろうか。特に、行政の恩恵が得られにくいへき地の独居高齢者や高齢者世帯においては如何なものであろうか。

今回筆者は、山深いへき地で独居生活をしている高齢のA子と出会い、「このような山の中で、高齢者が一人でどのようにして生きていけるのだろうか？」、「老人の三大悪と言われる病気・貧乏・孤独の問題はどうなっているのだろうか？」という、素朴な疑問と驚きからA子と数日間生活を共にした。A子の日常生活の一端に触れることにより、そのたくましさをも垣間見ることが出来た。

独居高齢者の生活に関する研究は、延近の面接とアンケートによる在宅ケアに関する報告[2)]をはじめ、文献研究による単身老人の住環境に関する報告[3)]やアンケートによる独居老人と老夫婦世帯者の生活と心理に関する報告[4)]、面接調査による住戸内外の関わりに関する報告[5)]やノルウェーの独居高齢者の生活実態に関する報告[6)]、その他医療情報ネットワークに関するもの[7)]や独居老人の犬猫に対する意識調査[8)]等、面接やアンケートによる報告が様々な分野から数多く見られる。しかし、参与観察による報告は、登張等[9)]の高齢者の日常生活における生活行動や人間関係を通した地域とのかかわりに着目した研究があるが、へき地山村の独居高齢者を対象にした参与観察による報告は殆ど見当たらない。登張等は、その報告の中で――高齢者の生活とそれを支える地域社会との関係は、個人の欲求に基づく行動とサポート環境との相互作用により築きあげられている――と述べている[9)]。それでは、へき地山村に居住する独居高齢者の場合、個人の行動と環境との相互作用はどのように行われているのだろうか。今回、A子を対象に参与観察を行い、生活実態と生活行動を把握し、その“生活の術”について明らかにしたい。このことは、21世紀の新しい高齢者像構築の一助になるものと考える。

なお、ここで言う“生活の術”とは、生活の方法や手段という意味で使用した。

倫理的配慮については、本研究の趣旨を十分に説明し本人の了解を得た。また、事例A子の紹介に当たっては、本論の骨子に支障がない程度に筆者の方で一部修正を加えた。

１）沖縄県立看護大学
２）志摩豊和苑

Ⅱ． 対象と方法

研究期間は、平成13年３月４日～平成13年３月７日。対象は、８２歳で独居の女性、A子である。

A子の住む熊野市は、三重県の南部に位置し市の面積の85%が山林である。北西部は山岳地帯で、東南部はリアス式海岸と白砂青松の景観が広がる吉野熊野国立公園内で豊かな温暖気候に恵まれる。基幹産業である農林水産業の低迷で人口減と高齢化が進行している。市は18の町からなり、平成13年３月末日の人口は21,091人、65歳以上人口は28.5%である。A子の居住するI町は、四方が山林で人口は300人余、その半数以上が65歳以上の高齢者である。

本研究に先立って：筆者の一人當山（以下、筆者と記す）は、沖縄県の山のない那覇生まれで那覇育ち。駐在保健婦として２カ年間、那覇に近い人口1,200人の島で勤務の後、沖縄本島南部の農村（人口7,20０人）で保健婦として勤務した。共同研究者の戸田は、その頃老人の在宅ケアをすすめる中で世話になった医師である。戸田は、A子の住む地で15年間診療所医師として勤務していた。筆者が平成12年11月、へき地山間部における高齢者の在宅医療の状況を見学した折、山の頂上近くで生活している独居の高齢者A子の存在にビックリしたのと同時に大変興味を抱いた。筆者は、これまで沖縄県内の離島へき地の状況をいくつか見てきたが、そこには集落があり、近隣の人々が少なからず生活していた。今回のA子のように、人里離れたところで高齢者が一人で生活しているという状況を見たのは全く初めての体験であった。

研究方法は、A子宅へ上記の研究期間の３泊４日筆者が宿泊し、参与観察を中心に行う他、介護度のチェック、市役所の既存資料から情報を得る。観察時の記録は、本人に説明し了解を得た上、記録を執りながら面接したり、就寝時や起床時、あるいは時間の合間など記憶の新しいうちにメモを執るようにした。A子は、標準語や土地の方言を交ぜて会話していた為、言葉は本人が話したことを出来るだけ残すように心がけた。

「老いと家族」の編者染谷[10]は、現代家族の現状分析を多様な視覚とアプローチから目指している。その著の中で、――ライフコースの後半において、加齢とともに生じるいくつかの変化に、定年退職後とそれに伴う経済状況、社会関係の変化、身体機能の低下に伴う日常生活能力の低下、さらに今まで持ちつづけていた者を失っていく喪失体験から生じる情緒不安定などがある。…（中略）…親と子の役割の変化は、高齢期における「役割逆転(role reversal)」と呼ばれている。…（中略）…役割の逆転によって生じる成人子の老親に対する役割には、大きく分類して経済的扶養、身体的（介護）扶養、精神的（情緒的）扶養とがある。――と述べている。今回のA子の場合、染谷の主張する精神的・経済的・身体的扶養の側面を中心に検討を行った。

なお、今回の３泊４日の関わりの目的は、生活状況の実態把握とし、対象との関係づくりに重点を置いた。その中で、介護度の評価に関する情報は収集したが、モラール等に関するデータ収集は敢えて実施せず、次の機会に行うこととした。

Ⅲ． 結果と考察

【A子と居住環境】（図１）

A子は、６人同胞で次姉、隣村の出身で小学校卒業後は街へ出て奉公をしていた。20歳の時両親へ呼び戻され今は亡き夫と結婚した。結婚と同時に夫は兵隊へ採られ本人は、舅・姑と同居の生活となる。結婚後は、70歳代まで山の仕事をしていた。子供４人（男２、女２）は、街で高校を卒業後、それぞれ結婚し県外や県内の街で生活している。A子夫婦は、街に家を新築し長兄夫婦と一時同居していたが、夫が亡くなってからは、長兄の嫁といざこざが絶えずやむなく元の居住地である現在の家へ戻ってきたという。長年△△教を信仰している。

図１　針葉樹林に囲まれたA子宅

A子の住む地域は、針葉樹林に囲まれた標高600～800メートルの山々に囲まれた山林地帯で、A子宅から数分降りた所に山小屋があり、そこに上ると四方に山々の頂きが見える。夏休み等にはキャンプする人々が集うとのことである。隣家は、山小屋から更に１kmほど下ったところに２軒（高齢者夫婦所帯１軒、90歳を超えた父親を世話するため定年後Uターンした60代夫婦の２世代所帯１軒）あるのみで、地域のI集落までは更に10㎞余の距離がある。一般の乗合バスは、市街地からＩ集落まで１日３往復運行している。その他、市の福祉バスが必要時には利用できることになっている。なお、詳細な状況については下記のとおりである。

生活用水：夫が生前に山からホースを施したものを現在も使用している。

電気など：24時間の終夜燈で、冷蔵庫、テレビ、コタツ、洗濯機等が備えられている。その他、コンロはプロパンガス、石油ストーブ、風呂は石油ボイラーを使用。

住まいなど：トタン葺き平屋。母屋（居間・仏間・寝

室・台所)、納屋、離れにトイレ（座位式、夜間は室内でポータブル使用）と風呂場がある。家の前にはお茶や大根が植えてある。A子宅の後方には、古い墓地と住居跡の塀がある。

電話：居間の食卓の真ん中に置かれ、手を伸ばせば何時でも支える位置にある。

既往歴：５年前、怪我で入院中にクモ膜下出血を起こし手術、現在年１回の定期検査を受けている。その他、腰痛、両膝関節の変形と膝関節痛があり、外出時は杖を使用している。

平成13年３月【３泊４日の宿泊】（表１）

【精神的（情緒的）扶養】

A子は、加齢のため亡き夫と共に一時は長兄夫婦とともに同居しようと試みたが、夫の死後長兄嫁とのトラブルが絶えなかった。そのような折、クモ膜下出血で入院、意識のない状態もあったが、手術を施行し後遺症も残さず元気になった。嫁とのトラブルを避けるため、退院後は現在の地で独居生活を送ることとなった。

子供や同胞等の身内による精神的扶養：子供４人は、それぞれ独立し街や県外で一家を構えている。子供たちは、日頃訪問してくることは滅多にないが、声を掛ければ来てくれる。特に、娘や隣村の妹とはマメに電話のやりとりを行い、コミュニケーションをとり、互いの状況

表1　A子宅への宿泊　　平成13年3月4日～7日（3泊4日）

初日	12時	A子宅到着 （※1）
	15時	散歩（茶畑、墓地、山小屋、○○明神）
	18時	夕食 （※2）
	21時	就寝
	確認できた電話：受信　5件（長姉、末娘、妹、友人、診療所医師）	
	訪問者：2人（末娘、タクシー運転手）	
2日目	7時すぎ	目が覚める
	8時	電話のベルで起床（友人M、降雪の心配）
		朝食 （※3）
	正午	昼食 （※4）、 訪問者（電気メーターのチェック係）
	15時	（當山、隣宅訪問の為、A子宅を一時留守にする）
	18時	夕食 （※5）
	21時	就寝
	確認出来た電話：受信　4件（友人M、妹、友人ほか）	
	訪問者：1人（電気メーターのチェック係）	
3日目		*（昨夜より水がでない）*
	8時	起床
	9時	朝食 （※6）
		訪問者（役所職員）
	10時すぎ	訪問者（隣人B）
	正午	昼食 （※7）
	16時～	隣人Bと温泉へ（入浴、夕食）
	確認出来た電話：発信　2件（長姉、友人）、 受信　2件（診療所、友人）	
	訪問者：2人（隣人B、役所職員）	
4日目	7時	起床
	8時	朝食 （※8）
	9時	家族の写真を見る
	11時	猫“タマ”の受診
	14時	昼食 （※9）
	15時	散歩（墓地、茶畑）
	（當山、A子宅を後にする）	
	確認出来た電話：発信　3件（妹、獣医院、ほか）、 受信　2件（長姉、友人）	
	訪問者：1人（タクシー運転手）	

※1　當山持参品―丹前、寝袋、食材（肉、沖縄そば、ジャガイモ、人参、玉葱、タンカン、ポーク缶詰、カレールー、スープ缶詰
※2　ご飯、肉汁、ほうれん草のおしたし、ゴーヤーチャンプルー
※3　夕食の残り（ご飯、肉汁、ゴーヤーチャンプルー、漬物）
※4　ソバ汁、キュウリの酢の物
※5　カレーライス（末娘の手作り）、肉汁、白菜のおしたし
※6　ご飯、味噌汁（白菜、きのこ、豆腐）、肉の煮付け
※7　ご飯、朝のみそ汁、モヤシ炒め
※8　ご飯、味噌汁（豆腐、しめじ、うずらの卵、葱）、昨日のもやし炒め
※9　ご飯、マシュルームスープ、サラダ（ブロコリー、トマト）、魚煮付け

をよく把握している。筆者が宿泊したときにも、末の娘が、「お客さんが来る…」ということで、自らA子宅を訪ね、掃除や布団の準備、それに石油ストーブの準備までもキチンと済ませていた。筆者と行動を共にする中、A子は、「今日は、○○料理をつくってもらった…」「今、一緒に散歩してきた…」など、子供に事細かに電話で話している。

A子にとって電話は、コミュニケーションを行う上で唯一の手段であり、身近に“人”は居なくても、必要時話ができる相手がいることである。このことが最も明るみになったのは、妹との連絡である。訪問３日目の夕方、隣人に誘われA子と筆者が温泉に行ったことが、翌日の午前には診療所の医師の耳に入り、医師より「昨日は、温泉に行ったんだって？」という電話があり、情報の伝達の早さにビックリさせられた。電話以外の精神的扶養では、週に１～２回長姉より食料品の郵送があり、へき地で独居生活をしているA子の食生活に対する長姉の配慮が伺われた。その他、長兄や次兄の家族もお盆や正月には、訪ねて来てA子と一時を過ごしている。また、一昨年には夫の法要があり、子供や孫それに同胞が家一杯に集まり賑やかだったとA子は自慢気に話していた。

知人や友人による精神的扶養：A子は、朝起きると、知人や友人に電話をかけている。気軽に話せる知人が数人いるようである。その他に、A子が最も信頼している友人Mがいる。A子が、「Mさんは、私の親みたいなものよ。兄弟以上の人よ」と豪語する友人Mは、元校長で街に住んでいる。Mが教員の頃、キャンプで子ども達を山小屋に連れてきた時に知り合いになった。当時幼かったMの子どもを夏休みに世話したこともあり、現在まで付き合いが続いている。A子は、「Mさんは、何かあったら何時でも電話してくれと何時も言っているよ」「この前病院へ行った時もそこの家で泊めてもらった」という。事実、筆者が宿泊した２日目の降雪時、朝一番にMより、「雪だけど、大丈夫？」という労いの電話があった。別の友人からは、「今日は、天気悪いがどうしている？」という問い合わせもあった。

山の来訪者・ペットの猫・先祖・神々による精神的扶養：A子は、「山に来る人は、皆私のお客さんよ」と口走るように、来客があれば、重い体を素早く起こし、「中へ入って、入って…」と家の中へ来客を招き入れ、「お茶がいい？　コーヒーがいい？」と、誰彼となく世話をしている。その一人は、先に紹介した友人Mである。また、筆者が訪問時、末娘を迎えに来たタクシー運転手は、電車へ間に合わせるとのことで、立ったままお茶を一杯飲んでいったが、訪問３日目に来所した役所職員や隣人は、家の中で30分ほどくつろいでから帰った。A子は、何時来客が来ても慌てないように、起床後はすぐに洗面をし、寝巻きから普段着に着替えている。A子曰く、「私はね、何時誰が来るのか分からないから起きたら、何時もこうして（更衣して）いるのよ」と。

その他、人間以外にペットの猫“タマ”や先祖・周りの神々が精神的扶養の一部を担っている。“タマ”は、筆者が訪問した当初から具合が悪く、食餌も摂らず時折、大きな声で「ギャッ！ギャッ！」と唸っていた。夜間は、A子の布団に一緒に寝ているが、一晩中苦しそうに大声を出す。A子は、昼夜となく、「タマ、苦しいか？頑張れよ、頑張れよ」と、まるで母親が我が子をあやすかのように声を掛けていた。訪問４日目は、“タマ”の診察の為に、往復12,000円のタクシー代を使い街へ出かけた。ペット以外では、亡き夫や舅・姑に対し、起床時・就寝時に、「お父さん、お祖父さん、お祖母さん、今日も一日有り難うございました。お休みなさい」と声に出して感謝の意を表している。同様に、「わしは、山でも無縁仏でも何でも感謝、感謝…」という。そのことは、散歩時に墓地や○○明神で、両手を合わせたり、近くに生えている草木を供えている様子からも垣間見ることが出来た。

このように、A子は子供や同胞、知人・友人に対して直接顔は合わさないまでも、電話という手段により頻繁にコミュニケーションをとっている。子供や同胞、知人・友人等との物理的な距離はあるものの、その距離を電話という手段でカバーしている。また、「Mさんは、私の親みたいなものよ。兄弟以上の人よ」という、Mとの関係や山の来訪者への対応で見られるように、A子の“人”に対する親切で優しいという一面は、重い病になる以前から持ち合わせていたのだろうか。あるいは、「一度は、死んだ人間だから…」という言葉からも伺えるように生死に関わる重い病を患った後からなのか、または、へき地で独居生活を強いられ“孤独”では居られないという状況からなのだろうか。A子自身にとっては無意識に行っている行為かも知れないが、一生懸命に“尽くす”中で、言葉を変えればA子自身の力で、“仲間”をつくっているという過程が推察された。

更に、A子の周りの“もの”を自らの生活に引きつけるという力は人間だけでなく、ペットや亡き夫・先祖、そして周りの神々など、有りとあらゆるものに対する“感謝”や“やさしさ”それに長年信仰している宗教がその源となっているのではないかと考えられる。このように、A子は遠く離れた家族の支えの他、“孤独”いわゆる精神的（情緒的）扶養の大部分を自らの力で獲得しているといえよう。

石嶺[11]は、沖縄県の長寿村といわれる大宜味村の高齢者のモラールに関する研究で、日本において、これまで近隣関係はモラールを高める要因には成り得ないと指摘されたものと考えられていたが、大宜味村の喜如嘉においては近隣関係もモラールを高める要因になることを明らかにし、今後近隣・友人などの非親族によるインフォーマルなサポートがますことが高齢者のモラールを高める要因をして望まれるとしている。今回、冒頭の研究方法でも述べたように、モラールについてスケールを使っ

たわけではないが、A子の場合、身内や友人のみでなくその環境をも含めた様々な要因がモラールを高め、へき地山間部での独居生活を維持する一因になっているのではないかと推察する。更に、横山[12]、土倉[13]は、動物の温もりが心をあたためる、あるいは老人の心の支えになっていると述べているように、A子の場合も、精神的な支えとして、ペットが“話し相手”・就寝時の添い寝の相手としての役割を担っている。

【経済的扶養】

食料品や日用雑貨については、子どもたちから毎週送られる宅配により大部分をカバーしている。訪問時、筆者は山の中は何もないだろうと予測し、表１に示した品々を宅急便で送付したが、冷蔵庫の中は既に食料品が一杯詰まっていた。その内容は、１カ月も保存が効くという豆腐やウナギ、チーズや果物等々である。また、押入には日用雑貨や食料品等が数ヶ月分備えられていた。家族との物理的な距離やへき地の不便さを、昨今盛んになってきた宅配という流通方法で補っている。郵便の活用は、子ども達だけでなく、交通の手段を持ち合わせないA子自身も公的・私的に郵便を活用している。規模は異なるものの、このような郵便の活用はPeng Jianming[14]の著書でも見られる。遠距離のへき地で交通手段を持たない唯一の手段として、郵便配達人を上手く活用し人間的な温かい交流が派生していく。同様に、A子の場合も郵便配達人は、週に１～２回の話し相手でもある。更に、A子は、本人の老齢年金の他、亡き夫の恩給があり経済的には幾分ゆとりが伺えた。それを確認できたのは、福祉バスを利用することは全くと言ってよいほど頭になく、顔馴染みのタクシーを気軽に利用していることや温泉での夕食（その日は、集団の予約があり、メニューが限定されていた）について、「もっと美味しいのがあったら良かったのに…」という発言、それに菜園の耕作を一日１万円で知人に頼んでいることや豊富な家具が揃っていること等から推察できる。A子の経済的扶養は、公的年金を中心として、その不足な部分を子供達の扶養で補っている。

【身体的扶養】

筆者が行ったA子の介護保険の査定結果は、「非該当」であった。評価は、筆者が４日間の訪問で観察したことや一部の項目については本人に確認をとった、その後共同研究者で検討した。A子は、外出時杖を使用しているが、80年山で生活しており、ちょっとした坂道や凸凹道も、上手く身をこなして歩いている。段差の多い墓地や○○明神へ散歩した折、筆者は運動靴でゆっくり歩いていたが、A子は筆者の支えも断り一人で草や木の枝を上手く使って坂道や凸凹道を歩いていた。１メートルほど段差のある畑にも、何処から降りようかと戸惑っている筆者をよそに、草の上を滑り台代わりに滑って降りた。登るのも草を使ってサッと登ったのである。このようなA子の動きに筆者は驚きの連続であった。

A子は、足腰の痛みで動作はゆっくりではあるが、日常的な家事は独力で十分可能である。宿泊時、食事の殆どを筆者が作り、A子はみそ汁を１回だけ作った。台所で長い時間立つことは腰が痛いとのことでいろいろと工夫がなされている。流しで食材を洗うとコンロの前の椅子に腰掛け、手が届く所に置いてある調味料を使う。また、生活の知恵も十分に持ち合わせており、先に述べたように菜園を知人に耕作してもらい、収穫はA子自身が行っている。収穫した作物は、子供達に送り残ったものをA子の日々の食材として使っている。なお、病院の受診であるが、過去にクモ膜下出血の既往があるため、年１回の定期検査を街の病院で受けている。病院へは、顔馴染みのタクシー運転手を電話で呼び、友人のM宅で宿泊するという手段をA子自身が持ち合わせている。このようにみると、足腰の痛みはあるが、日常的には身体的扶助は特に必要なく、A子自身でクリアしていると考える。

染谷は触れてなかったが、社会的扶養について、特に行政の恩恵については活用が難しい状況である。冒頭の厚生省が云々する…社会に支えられる存在ではなく…とあるが、この言葉はA子には当てはまらない。むしろ今回の降雪や大雨で道が決壊するなど悪天候の際の行政側の対応が少なくとも必要だと考える。A子の住む市でも、10数キロ先の集落地で月１～２回のデイサービスが市の保健活動として行われている。また、地区によっては民政員からのメッセージが郵送される「ふれあい郵便」や郵便局員による月単位の巡回があるが、A子の住むこの地区にはそれもなく、唯一有線放送がたまに流れるだけである。台風の時には、有線放送から“避難勧告”のアナウンスが流れるだけという。このような劣悪な環境で、自立して生活している高齢者を上手く支え、在宅での生活を少しでも長く維持できるようにするためには、行政側の目配り気配りが最も重要かと考える。

【沖縄の島と陸の孤島】

今回のフィールドワークと筆者の沖縄の島での生活体験から、その違いの一端を述べたい。筆者は、A子と会うまでは「沖縄の島の生活は大変だ！」と考えていた。確かに“シマチャビ（離島苦）”に表されるように、島の生活は天候に左右されることが大きい。しかし、それはA子の住む地域にしても崖崩れや道の決壊など自然に左右されることは同様に起こるのである。双方の大きな違いは、そこに本人以外に隣人が居るのかどうかという違いである。島には船で渡るという不便さはあるが、島に着けば隣近所に人々が住んでおり、人と人との交流が持て、情緒的な交流がある。しかし、A子の住む“陸の孤島”には隣人がなく、情緒的な交流が難しいことである。

【参与観察を中心としたフィールドワーク】

佐藤[15]は、…「フィールドワーク」とは、参与観察とよばれる手法を使った調査を代表するような、調べようとする出来事が起きているその「現場」（＝フィールド）に身をおいて調査を行う時の作業（＝ワーク）一般をさすと考えられ、この作業を通して集められるデータの多くは「一次（的）資料」、つまり調査者が自分の目で見、耳で聞き、肌で感じた体験をもとにした資料としての価値をもつ…といわれる。…また、フィールドワークというのは、カルチャー・ショックを通して異文化を学んでいく作業…と、述べている。

A子と筆者の初対面の出来事は、筆者にとっては正にカルチャー・ショックだったのである。今回の３泊４日で得られた資料、例えば、凸凹の山道を杖を使い歩く様、ペットへの労いの声かけ、電話や来客との応対などは、郵送によるアンケート調査や短時間の面接調査では得難い貴重な生活の実態として把握出来たと考える。更に、フィールドワークは参与観察だけでなく、その時々の様子を見ながら臨機応変にアンケートを取ることも可能である。今回も、A子の生活の様子を観察する傍ら必要な事柄を聞き出すことによって、介護度の評価を行うことができた。

Ⅳ．結論

今回、へき地山村に居住する独居高齢者の生活について、参与観察を行う機会に恵まれた。その結果、以下のことが確認出来た。

１　今回の対象において、精神的扶養は成人子である子供からの扶養をはじめ、対象者本人による積極的な友人の獲得、ペット、亡き夫や先祖、周りの神々への関心により扶養されていることが推察された。

２　経済的扶養については、公的年金のほか子供達により行われていた。子供達は、郵便という流通手段を活用し、対象者本人も公的・私的に郵便配達人を活用していた。

３　身体的扶養については、対象者自身が日常の生活を維持できる能力を持ち合わせていた。しかし、天候の悪化時には公的な支えが必要であることが確認出来た。

謝　辞

本研究を行うにあたり、快くご協力を承諾していただきましたA子さんはじめA子さんの家族それに近隣の皆様、診療所のスタッフの皆様に心より厚く御礼申し上げます。

参考文献

１）厚生省監修：平成11年版厚生白書…社会保障と国民生活、７、ぎょうせい、　1999

２）延近久子著：久留米市における独居老人の生活…実態調査結果と在宅ケア、久留米看護専門学校紀要、Ⅳ、　8―14、1984

３）林玉子著：単身老人と住宅、住宅、Ⅰ－１、15―21、1985

４）若林佳史他著：多雪都市における独居老人と老夫婦世帯者の生活と心理、総合都市研究、36号、79―112、1989

５）橘弘志他著：一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する研究、日本建築学会計画系論文集、515号、113―119、1999

６）大橋信夫他著：ノルウェーの独居高齢者の生活実態について、長野県短期大学紀要、54号、53―66、1999

７）河村剛史著：20世紀最後の5年間のキーテクノロジー…ニューマルチメディアの動向と技術開発の方向：正念場を迎える医療情報ネットワーク、エレクトロニクス、４１巻2号、71―74、1996

８）土倉義史他：独居老人の犬猫に対する意識調査、日本獣医師会雑誌、Ⅳ―2、265―266、1998

９）登張絵夢他著：農山村地域にみる高齢者の生活と地域との関係に関する事例的研究…高齢者の生活における「地縁」に関する研究、日本建築学会計画系論文集、540号、125－266、2001

10）染谷俶子編：老いと家族――変貌する高齢者と家族、６－７、ミネルヴァ書房2000

11）石嶺育子：老人のモラールに関連する要因についての研究――対人関係を中心に――18－20、琉球大学医学部保健学科修士論文、1989

12）横山章光著：アニマル・セラピーとは何か、ＮＨＫブックス、2001

13）土倉義史他著：独居老人の犬猫に対する意識調査、265－266、日本獣医公衆衛生学会、1998

14）Peng Jiaming著：Postmen in the mountains、 1997、大木康訳、山の郵便配達、集英社、2001

15）佐藤郁也著：フィールドワーク、新曜社、30～３７、1997

Journal of Okinawa Prefectural College of Nursing No. 4 March 2003.

" The art of life " of elderly people living alone in remote mountain village

—From real life through the participant observation—

Toyama fujiko P.H.N.,R.N.,D.H.S.[1)] Toda enjirou M.D[2)]
Taba mayumi P.H.N.,R.N,B.M.S[1)]

The authors came to grasp the life of elderly people living alone in remote mountain village by the participant observation, the telephone, and so on, and they examined it as" The art of the life ."As for " The art of the life ,"it was used in the sense of the method and means of life.

1) As for the mental support, an applicable person herself actively got a friend, the support from her adult child, made a telephone call and kept herself a pet. She was also found to be interested in a deceased husband, ancestors and surrounding gods.

2) As for the economical support, she made a living mainly by a pension. And her relatives sent foods and goods by mail service. She also made extensive use of the mail service.

3) As for the physical support, she had the ability to maintain her own daily life. But, at the time when the weather was not favorable , it was confirmed that the public support was necessary.

Keywords: elderly people living alone, remote mountain village, life, participant observation

1) Okinawa Prefectural College of Nursing
2) Shima houwaen